

ひめゆり平和祈念資料館の戦争体験の継承の取り組み

1. 1945年 沖縄戦（アジア太平洋戦争末期の戦い）

- ・90日余の激しい地上戦
- ・20万人余が戦死。そのうち米兵1万人余（6%）、本土出身日本兵、6万5千人余（33%）、沖縄県民12万人余（61%）。
- ・沖縄に配備された日本軍の方針
 - ①沖縄の一木一草までの戦力化→県民の根こそぎ動員
 - ②軍官民共生共死→住民の保護対策をないがしろに、住民にも米軍への投降を許さない
 - ③本土決戦のための時間かせぎの持久作戦
- ・沖縄の人々が沖縄戦を体験して心に刻んだこと
 - ①戦争がいかに悲惨なものであるか
 - ②戦争では人間が人間でなくなってしまう
 - ③命どう宝（命こそ宝）

2. ひめゆり学徒隊

- ・沖縄戦では、兵士だけでなく一般県民や十代の男女の生徒たちも動員。
- ・男子生徒（14～19歳）は鉄血勤皇隊として各部隊に配属、女子生徒は野戦病院に配属。
- ・「ひめゆり学徒隊」は沖縄師範学校女子部・県立第一高等女学校の生徒たち。ひめゆりはこの二つの学校の愛称。
- ・3か月間余りの過酷な沖縄戦の中で、動員された240名のうち136名が戦死。

3. 体験者がつくり、運営してきた平和資料館

- ・1989年6月23日、ひめゆり平和祈念資料館が開館。
- ・資料館のテーマは「戦争と教育」
- ・資料館の理念
 - ①教育の重要性
 - ②戦争体験を伝えていくことの大切さ
 - ③戦争の実相を訴えていくことが亡き師亡き友の鎮魂
- ・開館後、元ひめゆり学徒たちは資料館の証言員となり、戦争体験を伝える活動を開始。
- ・彼女たちは、戦争体験を伝える活動だけでなく、資料館のあらゆる仕事に携わり、資料館の運営を担う。
- ・ひめゆり資料館は、戦争体験者が建設し、運営してきた、世界でも類のない平和博物館。
- ・開館後33年間で、入館者は2300万人余。

4. 体験者から非体験者への継承

- ・元ひめゆり学徒の証言員たちがいなくなっても、戦争体験を伝え続けていくために、次世代継承の取り組みを開始。
 - ①体験者の証言映像を制作し展示室で上映
 - ②若い世代に伝わる展示を目指し展示をリニューアル
 - ③戦争体験を伝える活動を受け継ぐ非体験者の職員を育成
- ・現在、資料館の運営や戦争体験を伝える活動は、非体験者である私たち職員が担う。

4. 2021年2回目のリニューアル

- ・2021年4月2回目のリニューアルを実施。リニューアルのテーマは「戦争からさらに遠くなった世代へ」。
- ・リニューアルで試みたこと
 - ①見て分かる展示を増やし、伝わりづらいことをわかりやすく表現
 - ②生徒たちの笑顔の、自然な表情の写真を効果的に活用
 - ③「ひめゆりの戦後」の展示を追加
 - ④若い世代に伝わるようにテキストや表現を工夫
 - ⑤戦後生まれの職員が中心になって実施

5. 資料館の現状

- ・2年にわたるコロナ禍の影響で、入館者が90%近くも減少。存続の危機。
- ・これまでに8,200万円余のご寄付。
- ・ミュージシャンのモンゴル800のキヨサクさんが「支援ライブ配信の収益金を寄付」。
- ・地元の糸満市や中城村が市村内の小中学生の親子入館チケットの購入を通して支援。

